

2012年8月 花柳衛菊

2012年7月29日パリへの高速列車TGVの広い座席に背を預け、ぼんやりと外の景色を眺めながら、分刻みのスケジュールで駆け抜けた18日間を思い出している。あのアヴィニオンでの生活を何と表現したらいいのだろう。刺激的、魅惑的、夢のよう、120パーセントの充実感、どの言葉も私には物足りない。

7月12日早朝、地平線が見えるほどどこまでも続く牧草地、ゆったりと草を食む牛の群れ、時にひまわり畑に歓声を上げ、何年も変わらぬ光景にうっとりしながらパリのシャルルドゴール空港からTGVでアヴィニオンへ向かった。リヨンを過ぎて空の被いなくなったように景色がくっきり色鮮やかになり始めたならアヴィニオンは近い。もう今年で12年目なので気持ちは落ち着いている。私がどうしても実現したかった海外演劇祭参加公演も今年で17回目なのだ。

20年程前、海外演劇祭に参加したくてイギリス・エディンバラ演劇祭事務所に手紙を出した。1月にロンドンの説明会に出席するように、との返事もらったが渡航経験は新婚旅行程度しかない身には、どこにどのように行けばよいか見当も付かず、そのままになってしまった。ようやく手がかりを見つけたのが、エディンバラフェスティバル・FRINGE抜粋プログラムであった。日本人の美しいモダンダンサーの写真が載っていたのだ。モダンダンス協会に問い合わせ、盛岡に住む山口久美子さんを突き止め、彼女の紹介で知り合ったのが日本語、英語、フランス語を自由に操り、きめ細やかで大胆なモダンインド舞踊の名手シャクティであった。彼女との出会いが私の海外フェスティバル参加公演に火を付けた。彼女が海外で主催するフェスティバル参加劇場The Garage International Theatreにことごとく声を掛けてもらうようになったからだ。エディンバラ、モントリオール、アデレード、アヴィニオンと参加する内、アヴィニオンが私の大のお気に入りの場所になった。日本人で12年間もアヴィニオンを見続けたのは自分だけ、と思うと少しゾクゾクする。

アヴィニオン演劇祭の魅力は何といてもオフ参加公演の質の高さにある。2012年は海外から25カ国、計約7000名の公演関係者が集まり、1161のカンパニーが延べ25000余りのショーを23日間に、直径1.2kmの城壁の中で行う。そのどれもが参加カンパニーのオリジナル作品である。オリジナルと一言言ったが本当にどれもまるで見たことがない、新しい経験ができるショーなのである。そして技術が素晴らしい。これだけの公演が集まると、何だかシロウトっぽいがっかりすることが少なからずありそうだが、ここではそれは全くないと言ってもいい。どれも緻密な構成で稽古を積み重ねている公演ばかりである。フランスでは劇場ショーは一つの重要な産業なのではないか。芸術への国家予算がフランスに比べて日本は非常に少ない、と不満を言う人が多いが、フランス芸人達の質の高さと量ならば、と思わず納得してしまう。芸人が観客を育て、観客が芸人を育て国家まで動かしてしまう。

アヴィニオンTGV駅に降り立ったのは12日の昼12時過ぎ。明日の初日を迎えるまでの段取りで頭がいっぱいで、抜けるような空と多くの画家達を魅了した南仏プロヴァンスの強い日差しもあまり目に入らない。予約しているタクシーの運転手マールを探し出し、一緒に公演をしてくれる花柳丞乙女さんと合計5個の大きな荷物を大型タクシーに投げ込み旧市街へ向かう。18日間計15公演のアヴィニオン生活が始まったのだ。

一昨年からの稽古場に1つの寝室がついた、夏以外はヨガ教室として使われているアパートが気に入って借りている。建物の1階は倉庫や店でほとんどのアパートが2階以上なのにヨガ教室



我が家のアパートの前の塀。ポスターがざらり。

は1階。以前は世界遺産の町の一部を傷つけるように毎日コットンコットンと石の階段を滑らせて、重いバッグを引きずっていた難行がなく、本当に有難い。この、日が全く当たらないがそれが心地よいヨガ教室が、18日間の楽しい我が家になる。歩いて2〜3分以内にインの公演会場が3つ、オフ劇場が30以上あり劇場中毒の身には天国のような場所なのだ。ここアヴィニョンでは夏には住人がバカンスで町を出て、代わりに演劇祭関係者が入るので、町中が演劇祭一色になる。どの人もこの人もフェスティバル、フェスティバル。壁も扉も支柱もびっしりとポスターが張られ、町は宣伝で練り歩く芸人達と観客が入り乱れ、公園も商店も道も町全体が劇場と化している。空気までフェスティバルの香がする。

12日午後1時アパート着。まずは荷を解いて日用品の買出し、食事、稽古、公演準備、夜7時からの劇場リハーサル、と脱兎のごとく1日目を駆け抜ける。The Garage International Theatre はアヴィニョン橋の付け根にあるホテルの宴会場に黒幕を張りめぐらし、客席30程を置いた仮設劇場である。名前の通りスペイン、アメリカ、スイス、韓国、オーストラリア、インド、日本の芸人達が朝10時から夜10時まで1日合計7公演を行う国際色豊かな劇場で、他のフランス系劇場とは一線を画している。しかし、知名度が低いこと、場所が中央から外れていること、

Ce théâtre qui s'invite dans l'hôtel trois étoiles

En VO dans le texte

The Garage International accueille artistes australiens, américains ou japonais.



ガレージシアターの仲間達 劇場があるホテルの前で。ラ・プロバンス紙に紹介された記事

観客が集まらず公演キャンセルはここでは日常茶飯事である。着いた翌日からの公演で、宣伝活動もままならず、少ない集客でどうしてこんなところで公演をするのだろうか。プロとして成長したい、プロの芸人として行動したい、自分の作品を深めたいから、としか答えられない。日本では我々のような日本舞踊家はプロの舞台人として扱われることがほとんどない。ましてや古典に比べ創作作品などお遊びとしか見られない、踊りを創ることが自分の舞踊活動、と決めた時から自分の居場所は日本にはなかった。

でもここではオリジナル作品しか公演として受け入れられない、エントリーできない。

翌13日1時開演の集客十数名の最初の公演が終わり、ようやく他の公演を見るゆとりができた。さー見るぞー、と意気込んだものの何を見たらいいのかのチェックから始めなければならない。公演後の片付け、洗濯等が終了する4時から夜10時までの公演を分厚いプログラムの中から探す。今年は地元のマダム、リアンヌとマリアンヌの日舞ワークショップが4回入ったので、時間をうまく計画しないといい公演を見過ごしそうであった。

1日2〜3個、合計35公演程を見たが、今年の一押し公演はクラシックダンサー美男美女2人のモダンダンス「Tango mon amour」であった。技術がしっかりしていて構成が見事で、また二人のからみの振り付けが凝っていて、どの場面も実に美しい。女性がバケツに頭を突っ込んだ後、

近くに劇場がないこと、関係者にフランス人がいないこと、またフランス以外のカンパニーを入れるというシャクティの主義等で集客はいまひとつである。ただ芸人達の垢でまみれた濃厚な他の劇場に比べ、すっきりとした静かさが気に入っている。今回の私の公演はシェイクスピア原作「レディマクベス」。死後のレディを白薔薇で、死ぬ直前の彼女の狂気を、曼珠沙華を床にブスブス刺す魔女を絡めて表現した、日本舞踊技術を使った創作作品だ。スタッフはオーストラリア人の音響兼照明のピーターと会場係のメグのみ。15日間お客様は来てくれるだろうか。



公演直前にポーズ
左、衛菊、右、丞乙女さん

体を大きく旋回させると、水しぶきが放射状に飛び、大胆さと繊細さが計算づくの公演であった。オリジナル性を追求するアヴィニョンに於いてもっとも見逃せないのがマリオネット（人形劇）だ。それぞれのカンパニーでは独自の人形があり、使い方がまるで違う。何から何まで自分で考えているのだ。12年間で見たマリオネットが全て違うのだから驚きである。一言で操り人形とか指人形などと言えないのだ。今年はマリオネット4公演を見たが、その場で新聞紙を濡らして絞り、人形にしてしまったり、その後燃やしたり、破ったり丸めたり新聞紙が大活躍の公演と、映像の家の窓が開くと、窓の向こうで現物の人形が動き出す美しい公演が印象深い。

アヴィニョンのもう一つの魅力は客席500程でいつも満席のイン公演だろう。新しい価値観を提示することを大前提にしたフェスティバル主催の公演である。1公演が1週間ほど行われ、今年はオペラ、演劇、ダンス、展示等合計53のプログラムが組まれていた。送迎バスで行く石切り場での公演もある。インはオフとは違う、としっかり主張している公演である。どんなところが違うか。それは過去の価値観を覆す、という信念であり、そのためにはたとえどんなにつまらない公演でも受け入れる鷹揚さがある。観客を楽しませることには無頓着でもいい。ドレスアップした婦人が全裸の辟易とするほど暴力的なダンスにブラボーを叫ぶ。新しいッ、ブラボー！なのだろうか。価値観の破壊という至上命令が同じような作品をうみだしてしまうのもまた面白い現象である。

9時の日没後、10時半から教会の中庭に客席を組んで行われたイン公演「The Old King」はダンサーの存在そのものが奇跡であった。単調な低い繰り返し音をバックに1人の男性ダンサーが床を転げながら鍛錬された長い肢体で昆虫のようなポーズを繰り返す。下手から大量の水をホースで吹き付けられると、舞台左右にある大きなプラタナスが風でごうごうと唸るなか、彼は服を脱ぎ捨て、水しぶきに向かってよろよろと歩き出す。生命を誕生させた水と人類の祖先のような骨格と筋肉の男。巧妙な演出で自分の技術を披露するオフの公演とはやはり違う。

帰りのTGVの窓から広々とした美しい外の景色を眺めていると、12年もアヴィニョンに通い続け、アヴィニョンの片隅でどちらかという、ひっそりと公演しているような自分が何かを得ることができているのだろうか、単なる物見遊山で終わっているのではないか、いったい自分はこんなところに何しにきているのだろうか、と反省を込めた叫びが疲れた体を駆け巡る。自分は芸人であることを確かめたくて、彼らの熱血を感じたくて、刺激を受けたくて、芸人達と互いに抱き合いたくて、そして何より自分もあのような作品が創れるようになりたくて毎年アヴィニョンに通ってくる。

また来年も来ることができるだろうか、何の作品を持ってこようか、気だるい空気の中、ぼんやり考えている内に寝入ってしまった。ふと目覚めるとTGVはどんよりとした空の中を進んでいた。パリはもう近い。



Shake That Sin のダンサー達と